

瓜 尻 遺 跡

農業集落道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005.3

安芸市教育委員会

うり じり い せき
瓜 尻 遺 跡

農業集落道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005.3

安芸市教育委員会

発行所寄贈

序

安芸市は高知県東部の経済・文化の中核的な役割を果たす都市であるとともに、多くの文化的遺産を抱える太古よりの歴史的な都市でもあります。特に安芸川中流の安芸城周辺には、現在でも土居や武家屋敷群が残され、今も続く生活空間あると共に、古い町並みを今に伝える歴史的風土保存地区であります。

平成14年7月には、安芸市民待望の「ごめん・なはり線」が開通し、さらなる経済的な振興や観光客の誘致などが期待されています。

さて、平成14年度に発掘調査いたしました、安芸市土居～井ノ口の農業集落道路整備工事に伴う瓜尻遺跡の調査・整理が終わりました。ここにその成果を記録保存し、将来の安芸市民及び高知県民に伝え残したいと思います。

瓜尻遺跡は古墳時代から中世にかけての遺物散布地であり、安芸平野の周辺に散在する多くの遺跡のひとつであります。今回、奈良・平安時代の民家跡と思われる掘立柱建物跡の柱穴群が発見され、当時の庶民の生活を知る上での一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査・整理にあたり地元の方々をはじめ、高知県教育委員会文化財課、御教示をいただいた多くの方々の御協力と御厚意に対し深く御礼申し上げます。

平成17年3月

安芸市教育長 曽我 章

例　言

1. 本書は、安芸市土居西木戸～井ノ口・一ノ宮に至る農業集落道路整備工事に伴う、瓜尻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 同遺跡は安芸市土居・井ノ口に所在する。
3. 調査は安芸市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会文化財課の協力を得て行われた。
4. 調査期間
　　試掘確認調査　平成8年11月11日、12日、20日、29日
　　平成9年11月18日～12月10日
　　平成12年11月6日～9日
　　平成13年7月23日～24日
5. 本　調　査　平成14年5月9日～6月28日、11月14日～12月3日
6. 調査面積
　　試掘確認調査　344.86m²
　　発掘調査　297m²
7. 調査体制
　　調査担当　門田由紀　[安芸市立歴史民俗資料館学芸員]
　　坂本裕一　[高知県教育委員会文化財課社会教育主事]
　　統務担当　門田由紀　[安芸市立歴史民俗資料館学芸員]
8. 本書の執筆は門田と坂本が分担し、遺物写真撮影及び編集は門田が行った。
9. 発掘の整理作業員
　　発掘・整理作業は、以下の方々により行われた。記して感謝の意を表したい。
①発掘調査
　　上屋福美、影山博之、小松世喜子、小松　貢、坂井千寿(敬称略)
②整理作業
　　高知県埋蔵文化財センターのご協力により行った。
10. 出土遺物は02-6AUと注記し、関連図面・写真等ともに安芸市立歴史民俗資料館で保管している。
11. 報告書で用いる経度、緯度は世界測地系によるものである。

目 次

序.....	i
例言.....	iii
目次.....	iv ~ v

本 文 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査方法

1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の方法.....	1
3. 試掘確認調査の概要.....	2

平成8年度から平成14年度の試掘調査について

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境.....	5
2. 歴史的環境.....	5

第Ⅲ章 調査成果

1. 調査の概要と基本層序.....	8
2. 検出遺構と出土遺物.....	9

第Ⅳ章 まとめ.....	15
--------------	----

挿図目次

Fig. 1 安芸市位置図.....	1
Fig. 2 瓜尻遺跡位置図.....	1
Fig. 3 瓜尻遺跡試掘調査箇所及び柱状図.....	3・4
Fig. 4 周辺遺跡分布図.....	7
Fig. 5 調査区位置図.....	8
Fig. 6 遺構配置図(1).....	10
Fig. 7 遺構配置図(2).....	11
Fig. 8 SB1平面図.....	12
Fig. 9 調査区セクション図.....	13・14
Fig. 10 出土遺物実測図(1).....	17
Fig. 11 出土遺物実測図(2).....	18

表目次

Tab. 1 出土遺物一覧表	16
Tab. 2 遺物観察表	19

写真図版目次

PL. 1 調査区遠景	III区北壁セクション
I 区完掘状況	PL. 3 IV区北壁セクション
II 区完掘状況	I 区SD1セクション
II 区西完掘状況	I 区SD2セクション
III 区完掘状況	SB1P1柱痕完掘
PL. 2 IV区完掘状況	III区P27遺物出土状況
IV区SB1完掘状況	作業風景
I 区北壁セクション	PL. 4 出土遺物(1)
II 区東北壁セクション	PL. 5 出土遺物(2)
II 区西北壁セクション	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査方法

1. 調査に至る経緯

高知県東部の中心地である安芸平野の中央部に存在する瓜尻遺跡は、古墳時代から中世にかけての遺物を確認できる散布地である。安芸市の集落環境整備事業の農道(市道)拡幅工事に伴い、当遺跡の範囲及び性格を把握するため平成8年度より試掘調査を実施し、土坑やピットなどの遺構や弥生土器・古瓦・須恵器・土師器・陶磁類などの遺物を確認した。そこで平成12・13年度、さらに試掘調査を行ったところ、遺構が検出されたので本調査となった。本調査は平成14年度5~6月・11月~12月の2度にわたり安芸市教育委員会を主体とし、高知県教育委員会文化財課の協力を得て発掘調査を実施した。



Fig. 1 安芸市位置図

2. 調査の方法

調査方法は調査区を重機(パワーショベル)により表土を除去し、それより下は機械と人力を併用して行った。また、遺構を確認するとともに、写真撮影及び図面作成を行い記録に残した。



Fig. 2 瓜尻遺跡位置図

3. 試掘確認調査の概要

<平成8年度>

工事対象地の東端部分に13ヶ所のトレンチを設定した。遺構は確認できなかったが、TR4・6より弥生土器片が出土した。周辺の河岸段丘上には弥生時代の遺跡も多く立地するので、そこから流れ込んだものと思われるが、調査区周辺においても旧安芸川の自然堤防上には同時期の遺構が存在する可能性もある。

<平成9年度>

H8年度調査区の西側に11ヶ所のトレンチを設定した。TR3では土杭3基(SK1~3)、TR9では土坑1基(SK4)、TR11では土杭2基(SK5、6)が検出されたが、いずれも灰色と黒褐色と黄褐色の粘土質シルトブロックがまだらに混じる埋土であるため、近現代の瓦製造用の粘土採取坑であると思われる。TR3・9の南に設定したTR10からはビット13個が検出された。そのうちP6、7、8、11は0.8~1.0mではば等間隔に並ぶため、掘立柱建物跡の可能性があるが、TR内では全体のプランや規模を確認できなかった。

遺物は須恵器・土師器・白磁・青磁のほかにTR9・11からは古瓦が出土した。いずれも摩耗が著しく、周辺からの流れ込んだものと思われる。TR3・9ではビット群が検出されたことから調査区南側には遺構が広がっている可能性がある。また、調査区周辺では縄文陶器・白磁・古瓦などを表探したがいずれも摩耗が著しく、周辺から流れ込んだものと思われる。

<平成12年度>

帶谷川を挟んだ瓜尻遺跡の西側で遺跡の範囲外であったが、工事対象地内で遺物を表探したことから6ヶ所のトレンチを設定した。TR2の表土から約55cm下でビット7個を検出し、P1から須恵器の壺の断片が1点出土した。TR3ではビット6個、TR6では2個を確認した。また、須恵器・土師器・青磁などが表探された。今回の調査結果に基づき、瓜尻遺跡の範囲を西に拡大し、帶谷川から西側を本調査対象地とした。また、遺跡範囲内のH9年度調査区の西側にTR7を設定したが、遺構は検出されなかった。

<平成13年度>

H12年度調査のTR7西側に5ヶ所のトレンチを設定し、TR11で12個、TR2では3個のビットを表土直下で検出した。TR3~5では遺構が検出できなかった。遺物は須恵器・土師質土器・瓦がわずかに出土したのみである。

<平成14年度>

本発掘調査対象地区内で試掘を行っていない部分に3ヶ所のトレンチを設定し、遺構の有無の確認を行った。その結果、TR2よりビット7個、TR3ではビット6基を検出したため、IV区として引き続き本調査を行った。

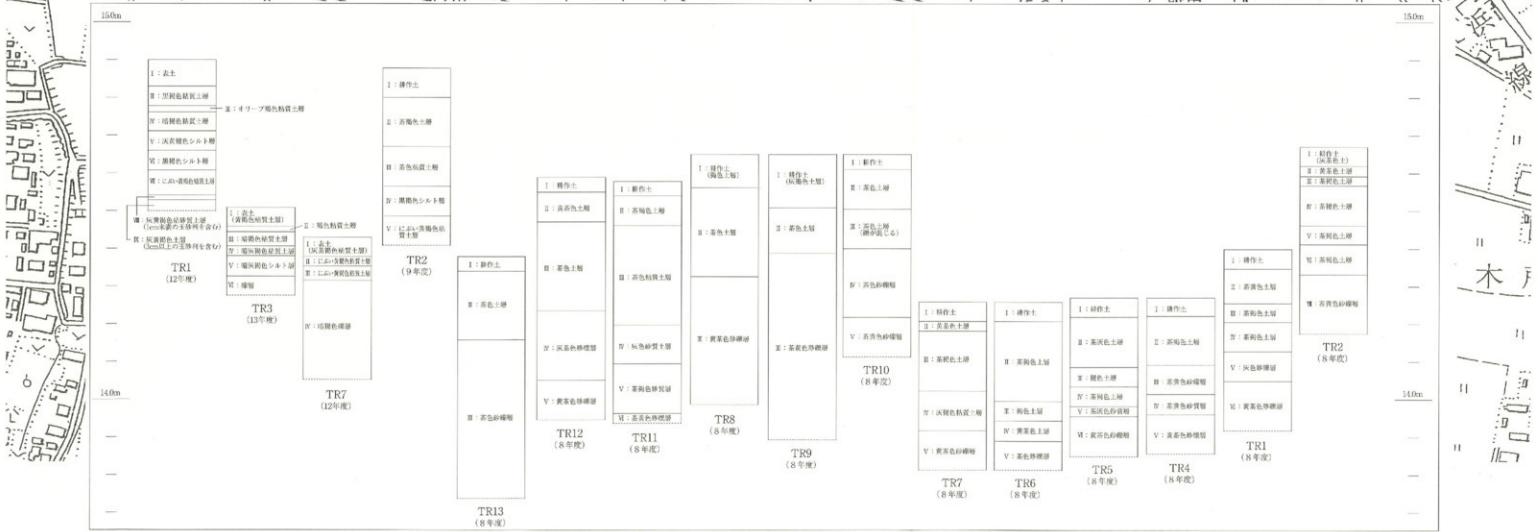


Fig.3 瓜尻遺跡試掘調査箇所及び柱状図

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

高知県の東部海岸は、高知平野の東端より室戸岬を経て徳島県との県境まで、山地が海岸際まで迫り、河川の流域に小平野が点在するという状況である。安芸平野はそういった小平野の中では一番大きく、安芸川と伊尾木川の河口に広がる東部の要地である。

瓜尻遺跡は、安芸川中流域に形成された沖積平野の中心地に立地している。安芸川からの比高差は約5~6mとあまり差がない。試掘や本調査などで地山の確認をすると砂礫層に行き当たり、かつての安芸川の氾濫等の跡であると思われる。後述するが、平野部の遺跡分布状況は遺物散布地が多い。弥生土器から須恵器・土師器・陶磁器など各時代の遺物が出土するが、土地改良や治水の対処の問題が解決できるまでは、山沿いの丘陵面や河岸段丘上・海岸沿いの段丘上が生活の中心地であったと考えられる。

2. 歴史的環境

旧石器時代や縄文時代の遺跡については、縄文土器片や香川県産のサヌカイト製の翼状剥片等、遺物の散布地は発見されているが、未だ確実なことは不明である。

弥生時代については先達の努力や発掘調査の成果により、詳細な当時の状況を知ることができる。内原野弁天池の南西に立地する勇前遺跡は、平成13年度の発掘調査により、平均して直径5m前後から8mの竪穴住居が4棟検出されている。讃岐地方からの撤入土器を含む弥生土器や磨製石包丁・打製石鐵・ガラス小玉などが発見され、弥生時代後期前葉の遺跡であることが判明した。

勇前遺跡から下流に1kmほど下った同じく左岸の河岸段丘上にある鶴ヶ岡遺跡は、昭和18年の発掘調査で住居址が発見され、壇棺や弥生土器の壺などが出土している。

鶴ヶ岡遺跡から安芸川をさらに1km下った左岸段丘上にある清水寺岡遺跡は、昭和60年に発掘調査されている。竪穴住居址6棟が検出され、弥生土器や紡錘車・石包丁・石鎌などが出土する弥生時代中期後半から後期前半にかけての集落である。

妙見山山麓の清近岡遺跡は、昭和53年発掘調査が行われている。ヒビノキI・II式の弥生土器や打製石包丁などの石器類を伴い、弥生時代中期末の土坑墓4基や弥生時代後期後半の竪穴住居址などが発見されている。

鶴ヶ岡遺跡からは弥生時代の壇棺が、また鶴ヶ岡遺跡の北東・江川の東岸に立地する日林坊遺跡からは、弥生後期の壺などが発見されており、弥生時代の墓制などの形態が窺える。

伊尾木の切畠遺跡では、明治7年に銅鏹2個が出土し、他にも弥生土器片や石斧・石鎌・石包丁なども伴出している。

川北の山田山遺跡からは、昭和35年に弥生中期の有柄石剣(安芸市指定文化財)が出土し、周囲から弥生土器片も発見されている。

また、安芸川左岸の江川の東岸丘陵上にある神谷遺跡からは、大正10年頃に弥生時代中期の広形

銅鉢(安芸市指定文化財)が出土している。この銅鉢は県内東限であり、当時の集落祭祀の様子と祭祀から考えられる集落の時代的変遷を窺うことができる。

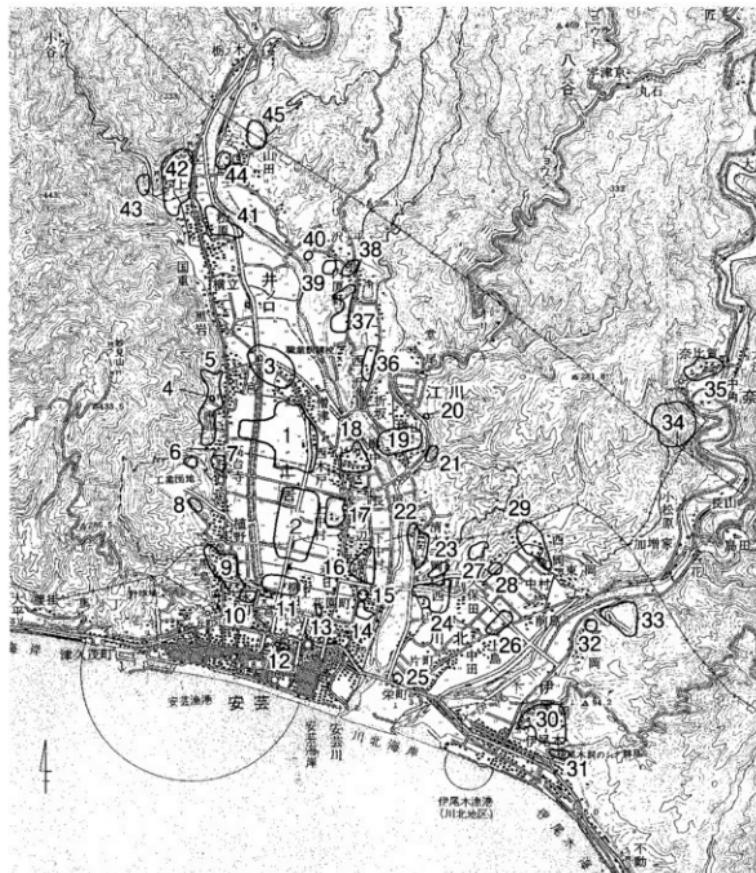
古墳時代に至ると遺物散布地はあるものの、確認されている古墳はただ1基である。現在消滅しているが、一ノ宮古墳は、妙見山山麓の清近岡遺跡の範囲内にあり、銀環や馬具類・須恵器等を出土している。川北の西ノ島遺跡では、昭和34~40年にかけて表土下1.2m程の粘土層から勾玉・土師器・須恵器・杭木などが出土している。また5世紀末から6世紀初頭の須恵器に伴出した手捏土器が1個出土している。同じく安芸川中流の河岸段丘上からは、陶質飾馬が発見されており、古墳時代から古代にかけての河川祭祀などが考えられている。

古代における安芸の状態は、いまだはつきりしない。古代の遺物散布地だと思われていた前述の勇前遺跡は、発掘調査により弥生時代を中心とする遺跡であることが判別した。遺跡分布図による遺物散布地は、安芸平野の中央部にかたまっており、山際の丘陵地などから流れ込んだ遺物が表採されたものと思われる。おそらく山際の河岸段丘上や安芸川の自然堤防上といった現在の住宅地と重なる場所に、古代の人々も生活を営んでいたと考えられる。

中世から戦国時代に至ると、安芸氏の居城であった安芸城をはじめ、山城や中世土器の散布地などの遺跡が見られる。また、妙見山の南東山麓の妙見山遺跡からは、人骨が入った猿投窓産の灰釉双耳壺や刀子が出土し、中世の有力者の墓地と思われる。さらに東南に山麓を下ると、詰部と堀切1条が残るが、城主など詳細なことは不明である植野城跡がある。安芸川と伊尾木川に挟まれた山麓には、平家物語で有名な安芸太郎・安芸次郎の2つの城跡が200m離れて並んでおり、堀切や詰・腰曲輪・段状に整地された遺構が不完全ながら存在する。その他にも、黒鳥遺跡(弥生土器から近世陶磁器など各時代の遺物の散布地)や上エヒイ遺跡、ヤナギダ遺跡、春日遺跡、清水寺岡遺跡などの中世陶磁器類の散布地が点在している。

参考文献

- 日本の古代遺跡39「高知」保育社
- 『勇前遺跡』高知県埋文センター発掘調査報告書第77集
- 『清水寺岡遺跡』安芸市教育委員会
- 『安芸市遺跡分布地図帳』安芸市教育委員会
- 『コゴロク遺跡群』奈半利町埋文発掘報告書第一集



1 瓜尻遺跡	弥生～古代	16 春日遺跡	中世	31 有井城跡	中世
2 ジョウマン遺跡	古墳・中世	17 シガ屋敷遺跡	弥生・古代・近世	32 鶴ヶ内遺跡	中世
3 マテダ遺跡	古墳・中世	18 安芸城跡	中世～近世	33 切畑遺跡	弥生
4 一ノ官古墳	古墳	19 鶴ヶ岡遺跡	弥生	34 奈比賀城跡	中世
5 清近岡遺跡	弥生	20 日林坊遺跡	弥生	35 奈比賀遺跡	中世
6 妙見山遺跡	中世	21 神谷遺跡	弥生	36 中野遺跡	縄文・中世
7 高台寺遺跡	弥生	22 清水寺岡遺跡	弥生・中世	37 勇前遺跡	弥生・古代・中世
8 植野城跡	中世	23 安芸次郎城跡	中世	38 内原野廻跡群	近世
9 黒鳥遺跡	弥生～近世	24 西ノ島遺跡	古墳	39 善次屋敷遺跡	中世
10 上エヒイ遺跡	中世	25 安芸橋畔遺跡	弥生	40 野町遺跡	古墳
11 ヤナギダ遺跡	中世	26 上島遺跡	弥生	41 笹原遺跡	中世
12 江ノ川畔遺跡	弥生	27 安芸太郎城跡	中世	42 宮ノ上遺跡	弥生
13 河原田遺跡	弥生	28 桜木遺跡	古墳	43 小谷遺跡	弥生
14 金救遺跡	弥生	29 山田山遺跡	弥生	44 西妙見谷遺跡	弥生
15 玉造遺跡	古墳	30 闇遺跡	弥生～近世	45 山田遺跡	弥生

Fig. 4 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

第三章 調査成果

1. 調査の概要と基本層序

今回の調査は、試掘確認調査の結果によって拡大した瓜尻遺跡の範囲、帶谷川の西側を対象として実施した。調査区は水路等の関係上、西側からⅠ区～Ⅳ区に分けて設定した。また、調査対象地は現況道路とビニールハウスの間であり、ビニールハウスへの出入りの関係もあり、Ⅱ区は東西に分けて調査を行わざるを得なかった。各調査区や各遺構については、各調査区内に任意のグリッドを設定して実測を行い、公共座標を使用して測量を行った。

各調査区内の堆積状況はほぼ同様であり、遺構検出面である褐色シルトを含めて河川堆積に由来するシルト層が水平に堆積する。Ⅰ及びⅡ層は耕作土と底土である。Ⅲ層は黄灰色シルトで酸化した鉄分が多く含む。Ⅳ層はオリーブ褐色シルトで遺構埋土の主体となる層であるが、遺物はほとんど含まない。V層は褐色シルトで上面が遺構検出面である。また、Ⅳ区では表土直下から遺構検出面まで近現代の盛り土層があり、検出面は圃場整備の際に削平を受けているものと思われる。

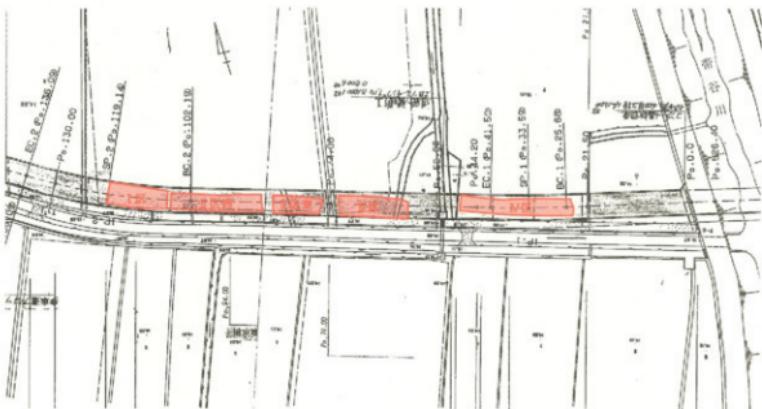


Fig. 5 調査区位置図 (S=1/1000)

2. 検出遺構と出土遺物

(1) I 区

調査区の西端に位置する。東西方向にN-68° -Wで平行して伸びる溝2条を検出した。SD1は検出面での長さ約8m、幅約1.1m、深さ約5~8cmを測る。SD2は検出長約6m、幅0.4~0.9m、深さ約5cmを測る。底はSD1・2ともに凸凹が激しい。後世の削平を受け徐々に浅くなり、調査区中央でプランは消えるが、SD2は調査区北壁の東端に断面が残り、東方向に続いていることが確認できた。調査区西壁の断面から、SD1は幅約1.5m、深さ0.4mを測り、断面形状はU字形であり、SD2は幅約1.5m、深さ約0.2mを測り断面形状は逆台形であることが見て取れる。埋土はSD1・2とも同様の堆積状況で三層である。I層は暗灰黄シルトで小礫を多く含む。II層は灰色シルトでやや大きめの小礫を含む。III層は暗灰黄シルトである。断面観察からどちらの溝も同時期に機能していたものが洪水などで一気に埋まったものと思われる。

出土遺物はほとんどなく、図示し得るものはなかった。

(2) II 区西

検出遺構は溝2条、ピット35個である。溝はI区で検出されたSD1、2と同一遺構と考えられ、東西方向にN-74° -Wで平行して伸びる。

SD1のプランは幅が一定しておらず、約0.4~1.4mで深さ20cm~40cmである。北側のSD2のプランは削平された結果、調査区中央部附近は消滅している。北側の肩は調査区外であるため正確な幅は不明であるが、I区からほぼ同じ幅で掘られていると考えられる。こうしたプランは削平を受けた結果であると考えられ、溝が掘られていた地形が本来は緩やかな起伏があったことが窺える。また、底はどちらも凸凹が多く、ピットや土杭と考えられる部分もあるが、ほとんどがSD1・2に切られていると考えられるが埋土は判別がつけがたく、斬り合い関係は不明である。遺物は須恵器片2点、土師器片5点がSD1から出土した。

調査区東端ではSD1・2の下面でピットを検出した。円形プランを呈し、直径約25~30cmを測るものが多い。埋土は褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルトである。P3・9・11では柱痕を確認した。柱痕から推測される柱の直径はP3・11が約20cm、P9は約24cmである。また、P9とP13の付近では切り合うピットが多く、複数回の建て替えを考えることができるが、調査区内では建物のプランを確認することはできなかった。遺物はP12から須恵器片1点、P13から土師器片4点である。

(3) II 区東

検出遺構は溝2条、ピット12個である。溝2条は調査区西端では削平を受け検出できなかつたが、I区SD1・2と同一遺構であると思われ、東西方向にN-64° -Wで平行に伸びる。溝、ピットとともに遺物はほとんど出土しなかつた。

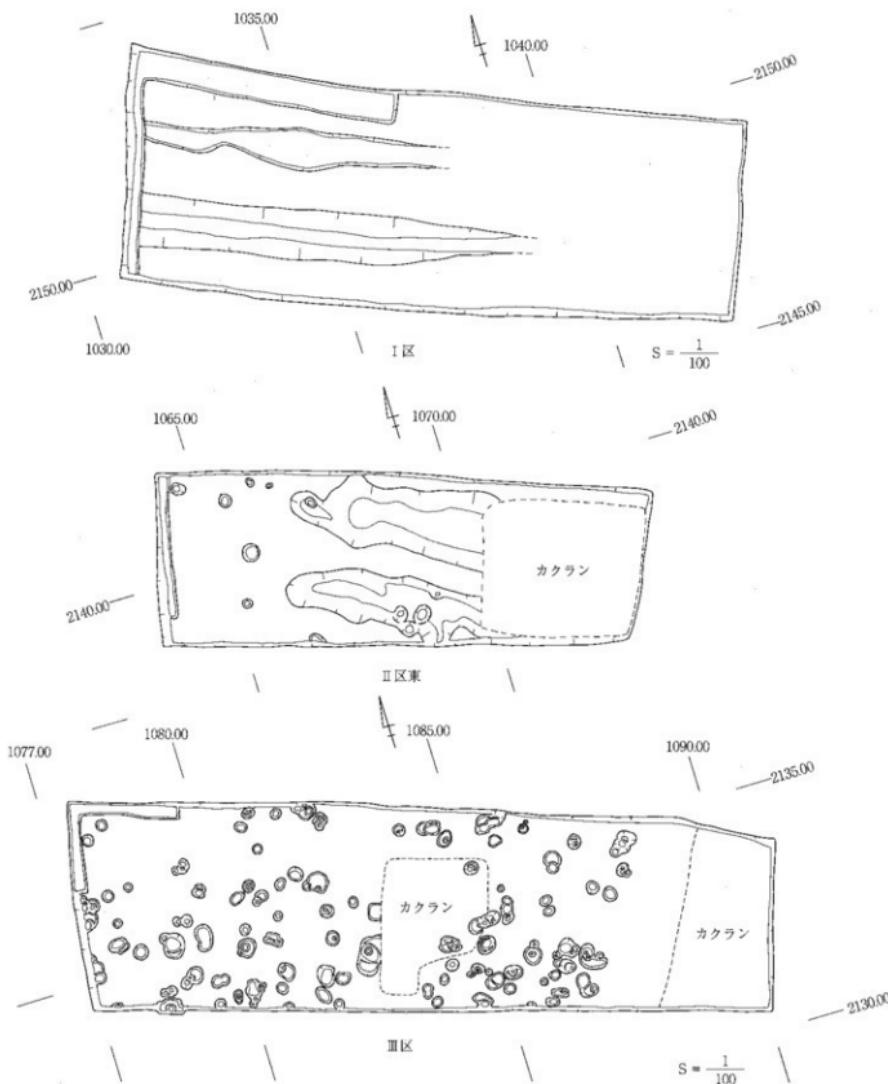


Fig. 6 遺構配置図(1)

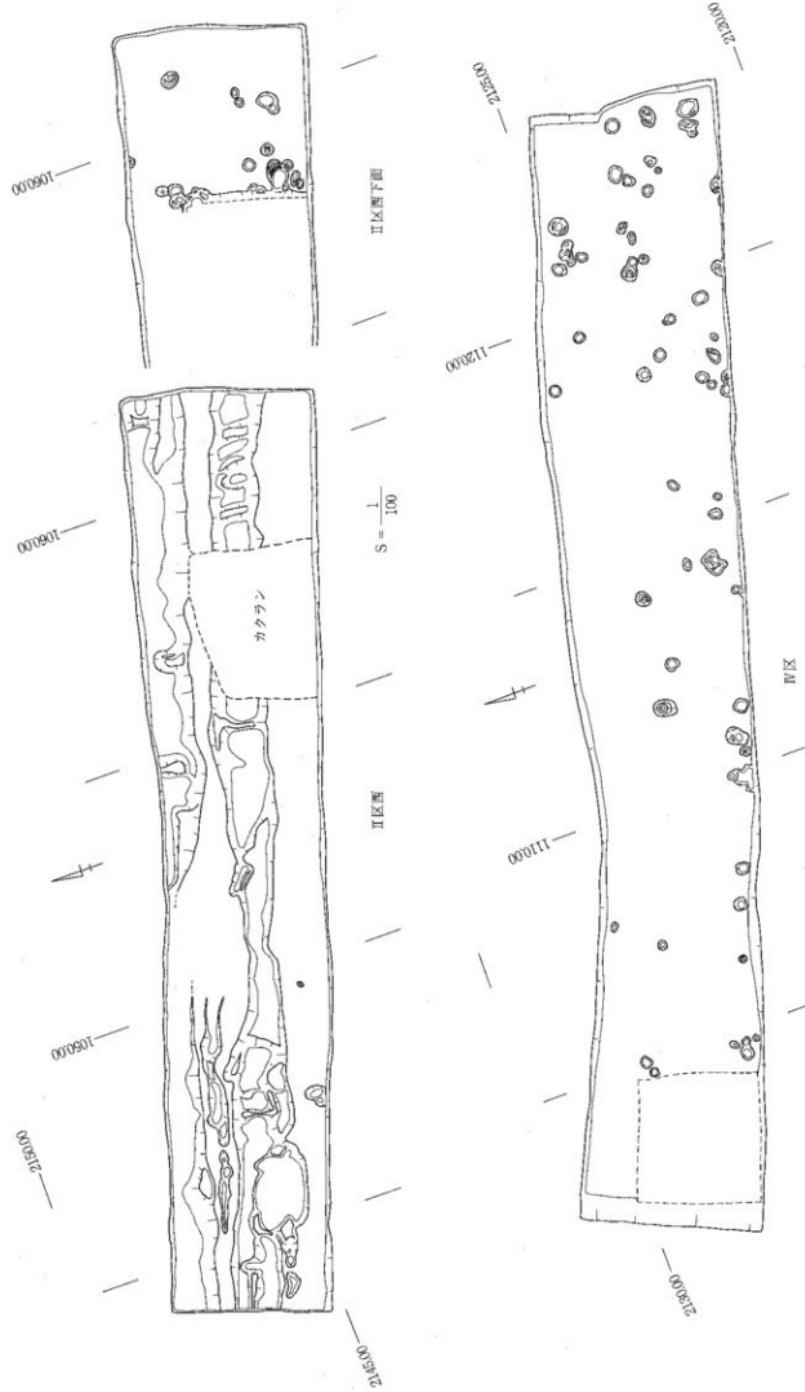


Fig.7 造林記述図(2)

(4) Ⅲ区

今回調査でもっとも遺構が集中して検出された調査区である。検出遺構はピット約140個である。切り合い関係にあるものが多く、プランを確認することはできなかったが、幾度かの建て替えが行われたと考えられる。

遺物はピットからの出土であるが細片が多く、図示し得たのは2点でいずれも須恵器壺である。Fig.10-12は、P1から出土した肩部片である。外面にはタキ痕が残り、自然釉が斑点状にかかる。内面は頸部直下にハケによる調整、上胴部に青海波文が残る。Fig.11-14は、P27から出土した貼付高台の底部片である。外面はナデ調整を施すタキ痕が残り、内面はナデ調整である。その他にP6から土師器片1点、P8から土師器片1点、須恵器片1点、P20から土師器片1点、P48から須恵器片1点、P72から土師器片1点、P75から須恵器片1点が出土した。

(5) Ⅳ区

表土下は遺構検出面まで近現代の客土があり、削平を受けていると思われ、I～Ⅲ区で検出したSD1・2は確認できなかった。

検出遺構はピット70個である。一辺20～25cmの方形プランを呈する物が多く、Ⅲ区に比べると密度は疎である。多くのピットで柱痕が確認され、調査区東端で掘立柱建物跡1棟を確認した。

SB1のプランは南側に広がる可能性もあるが、確認できたのは1間×2間であり、主軸方向はN-87°-Eである。規模は梁間1.74～1.76m、桁行3.97～4.19mを測り、桁行の柱間距離は2.09～2.21mである。柱穴は方形または楕円形プランを呈し、長径が31～35cm、短径が25～27cmを測る。柱痕はP3を除きすべての柱穴で確認し、直径13～22cmを測る。

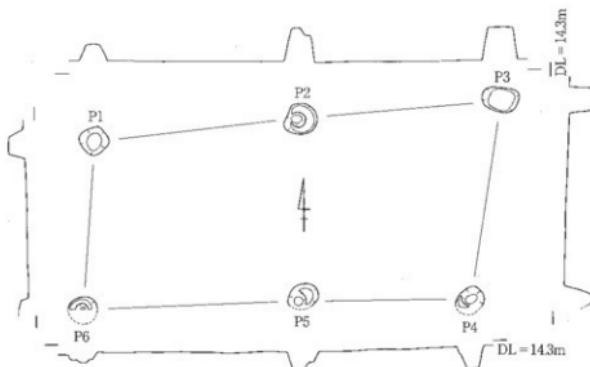


Fig.8 SB1平面図(S=1/50)

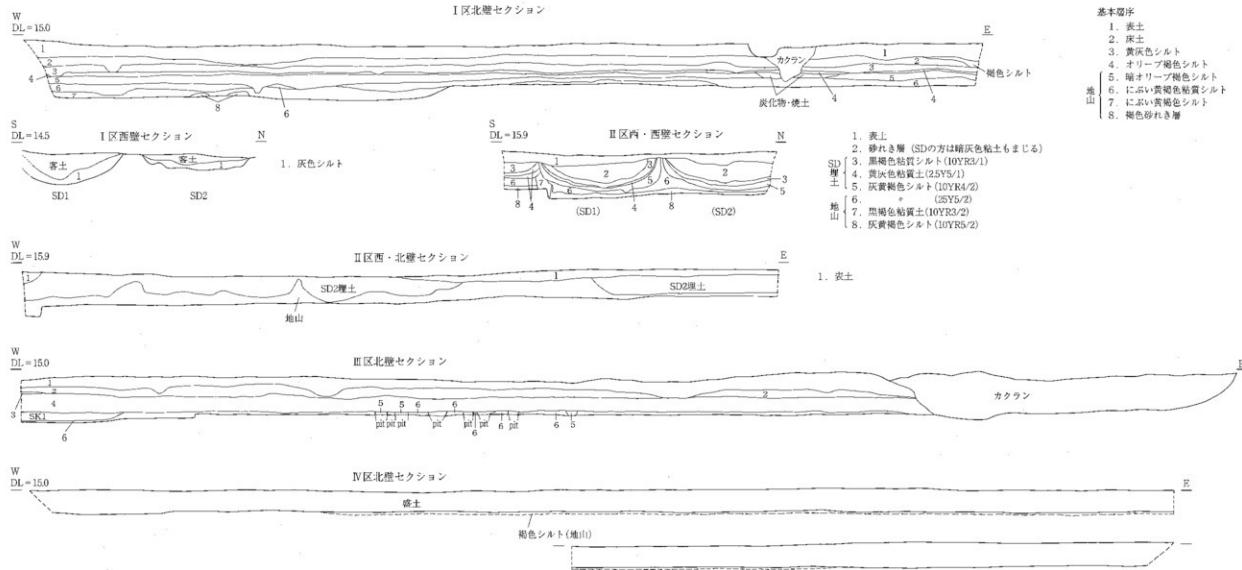


Fig. 9 調査区セクション図 (S=1/50)

第IV章 まとめ

今回の調査では、掘立柱建物1棟、溝2条、と多数のピットを確認することができた。全体的に出土遺物は少なく、図示することのできた遺物は、表採または試掘確認調査時の近代の擾乱坑から出土したものがほとんどである。須恵器や土師器のはか、綠釉陶器や青磁などの輸入陶磁器、古瓦や土鍾などもあるが摩耗が著しく、周辺からの流れ込んだものがほとんどであると思われる。

確認した2条の溝は、調査区にはほぼ並行する。現耕作土直下から掘り込まれており、上部は削平されている可能性がある。遺物は須恵器、土師器、白磁、備前播鉢などが出土したが、いずれも摩耗が著しい。埋土中には小礫が多く含まれていることから洪水などによって一時期に埋没したものと考えられる。SD1・2ともに出土遺物や埋土の状態に差異はなく、中世以降に同時期に機能していたものと思われる。

ピットは、II区の東端からIV区に集中して検出された。特にIII区では密度が高く、切り合う物も多く確認された。その多くは掘立柱建物を構成するものと考えられるが、限られた調査範囲内では1棟を確認できたのみである。これらのピット群は、出土遺物から8世紀末頃に属するものとして捉えることができる。

高知県内で8世紀代を含めて古代に属する掘立柱建物は、香長平野に多く確認されており、南国市の土佐国衙跡、田村遺跡群、白猪田遺跡、野市町の曾我遺跡、深淵遺跡、下ノ坪遺跡、香我美町の十万遺跡などで確認されている。これらの遺跡は白猪田遺跡を除き、一辺が1m内外を測る方形プランの大型柱穴を持ち、軸方向をそろえて整然と並ぶ建物群が主体であり、官衙あるいは官衙関連施設として捉えられるものである。今回の調査で検出されたピットは円形のものが多く、柱穴の直径は20~30cmを測る小型のものばかりである。SB1は調査区外に広がる可能性があるため正確な規模は不明である。また、ピットから出土した須恵器と土師器についても細片が大半である。今回の調査範囲は狭小なため、遺跡のごく一部の確認したにすぎないが、遺構の規模や出土遺物からは上記の官衙関連の遺跡とは性格を異なるものであり、古代の一般集落の可能性がある。

これまでの安芸市の発掘調査事例は安芸平野をはさむ東西の丘陵上が中心であり、清水寺岡遺跡、清近岡遺跡、勇前遺跡などで弥生時代中期~後期の集落が確認されているが、平野部では五藤家屋敷跡以外には本格的な調査は行われておらず、平野部の詳しい様子がわかっていないかった。

安芸平野は安芸川の堆積作用によって形成され、さらに自然堤防が発達するに伴い、水田や畠として利用できる土地が増え、生活の場が周辺の丘陵部からしだいに平野部へと広がり、集落を形成してきたと考えられる。今回の調査の結果、井ノ口周辺には8世紀頃には集落が存在していることを確認することができた。また、近年徐々に調査事例が増え、瓜尻遺跡の南側に所在するジョウマソ遺跡では道路拡張に伴う発掘調査が行われ、5世紀代前半の溝跡が検出されており、平野部の利用がこの時期には行われていたことが報告されている。また、瓜尻遺跡の北側に所在する笠原遺跡では試掘確認調査が行われたが、表土下で砂質シルトの堆積がわずかに見られるだけで、すぐに河川疊層となることから、調査した部分は旧安芸川の河床であることを確認することができた。

こうした調査成果の蓄積により、旧地形の復元や土地利用の歴史を徐々に明らかにしていくことができる。今後、安芸市の歴史を詳細に明らかにしていくためにも、さらなる調査成果の蓄積を期待したい。

参考文献

『安芸市史』安芸市教育委員会

『白猪田遺跡』南国市埋蔵文化財調査報告書第17集1997年

『ジョウマン遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第82集2003年

池澤俊幸「土佐における古代前期の建物群」－研究の現状と課題－『古代文化』第52号2000年

Tab. 1 出土遺物一覧表

本調査区出土遺物一覧

年 度	調査区	遺 物
平成14年度	II区西	須恵器片17、土師器片52、陶器片 2
	II区東	須恵器片 3、土師器片 4
	III区	須恵器片 8、土師器片17
	IV区	土師器片24

試掘調査出土遺物一覧

平成8年度	TR4	弥生土師器片 2
	TR6	弥生土師器片 3
平成9年度	TR1	須恵器片22、土師器片75、縄軸陶器 1
	TR2	須恵器片 4、瓦器片 1
	TR3	須恵器片36、土師器片153、弥生土器片 2、陶器片 8、瓦片 1、炭化物 1
	TR5	土師器片 6
	TR9	須恵器片89、土師器片741、陶器片13
	TR10	須恵器片13、土師器片11、陶器片 9、瓦片 4、粘土 1
	TR11	須恵器片 1、土師器片42、陶器片 6
	TR2	須恵器片 1
平成12年度	TR6	須恵器片 4
	TR7	須恵器片 1、土師器片 1
	表採	須恵器片12、土師器片 6、青磁片 1、陶器片 1

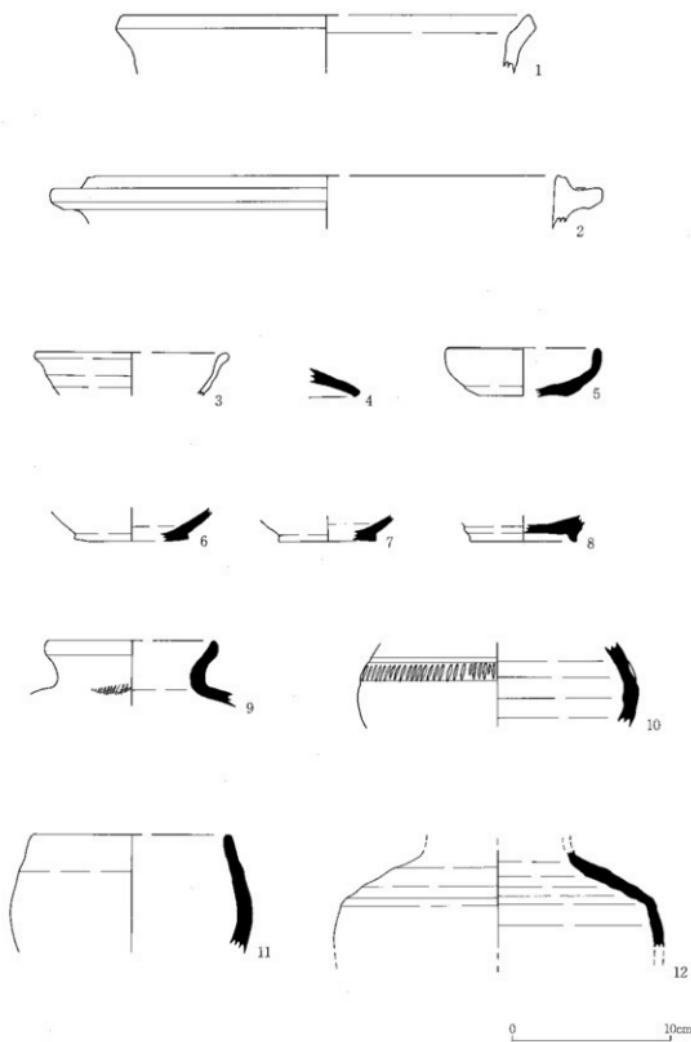
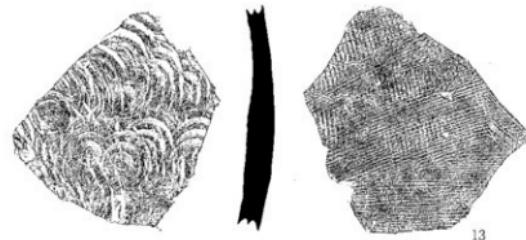


Fig.10　出土遺物実測図(1)



13

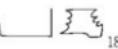
14

15

16



17



18



19



20

0 10cm

Fig.11 出土遺物実測図(2)

Tab. 2 遺物観察表

地図 番号	年度	調査 箇所	遺物	器種	器形	色調 (内/外)	胎土	法量			調整(内/外)	特徴	備考
								口径	器高	底径			
1	H9	TR3	パンク7	土師器	灰陶器	にぶい・輕/にぶい・輕	1~4mm大砂粒 を含む	24.8	(36)	-	内面回転ナデ		口縁部
2	H9	TR9	SK4	土師器	鍋	黄褐/黄褐	灰等砂粒多く含む	28.2	(33)	-	回転ナデ/回転ナデ	取手下から側面被熱 うける	口縁部片
3	H9	TR3	両面パンク	土師器	碗	灰白/灰白	チャート含む	11.6	(265)	-	回転ナデ/回転ナデ	口縁端部は丸みをもつ	
4	H9	TR9		灰陶器	盃	灰白/灰		長3.8			内面回転ナデ		
5	H9	TR3	SK1	須恵器	杯	灰白/灰白	石英含む	9.1	2.97	5.2	回転ナデ/回転ナデ		
6	H9	TR9		須恵器	杯?	灰白/灰白	石英含む		(2.1)	7.0	ナデ/ナデ	外底部に糸切り痕有り。	全体に摩耗。
7	H9	TR9		須恵器	杯	灰白/灰白	石英含む		(1.6)	6.0	ナデ/ナデ	外底部に糸切り痕有り。	全体に摩耗。
8	H9	表探		須恵器	杯	灰白/灰白			(1.6)	6.6			摩耗なし
9	H9	TR9	SK4	須恵器	壺	灰白/灰			10.2	(4.0)	頸部ナデ、青海波状当て具度/平行タタキ後ナデ		
10	H9	TR9	SK4	須恵器	壺	灰白/灰白	石英含む		(5.2)	-	回転ナデ/回転ナデ	肩部へラ状工具による列点の上下を沈組織ではさむ	肩部片
11	H14	II区西	SD I	須恵器	短腹壺	灰白/灰白	石英、赤色、風化層の細粒含む	12.0	7.3	-	ナデ/ナデ		摩耗なし
12	H12	TR2	P1	須恵器	壺	灰白/灰白			(8.0)		ナデ/ナデ	約1/4残存。頸部薄い。 無頭口か。肩がなだらかで、あまり張らない。	
13	H9	TR9		須恵器	壺	灰白/灰白					青海波状当て具度/平行タタキ後ハサ調整	自然崩がかかる	
14	H14	III区	P27	須恵器	壺	灰白/灰白	石英、細砂粒含む、精選				ナデ/ナデ(タタキ痕残る)	貼付高台	
15	H14	II区西	SD埋土	白磁	碗	灰白/灰白			(1.2)	-			D類
16	H9	TR10		白磁	皿	灰白/灰白		11.6	(245)		外面にナデ		
17	H9	表探		青磁	碗	灰ナリーブ/灰ナリーブ		18.8	(3.0)				15世紀D類
18	H9	TR10		青磁	碗	灰白/灰白	精致		(1.7)	6.2		摩耗が著しく、見込み高台外間にわずかに施が残る。施釉は高台外縁まで被熱し、釉が溶ける。	
H14	II区西	SD II	須恵器	杯	灰白/灰白	石英、細砂粒含む、精選			(2.9)	7.1	ナデ/ナデ	焼成やや小炎、貼付高台	摩耗なし
H14	III区	P1	須恵器	壺	灰白/灰白	石英、細砂粒含む、精選			-		頸部底下ハケ、上胴部青海波状当て具度/タタキ	自然崩が斑点状にかかる	

瓦観察表

19	H9	TR9		瓦		灰白/灰					内面: 布目裏 残る 外側: 格子状 のタタキ	
----	----	-----	--	---	--	------	--	--	--	--	----------------------------------	--

土錘観察表

20	H9	TR9		土錘器	土錘	灰白/灰白	石英、チャート含む	全長 3.32	孔径 0.57			脚部欠損 全体に摩耗
----	----	-----	--	-----	----	-------	-----------	------------	------------	--	--	---------------

写真図版



調査区遠景(東より西方面を望む)



I 区完掘状況



II 区東完掘状況



II 区西完掘状況



III区完掘状況



IV区完掘状況



IV区SB1完掘状況



I 区北壁セクション



II 区東北壁セクション



II 区西北壁セクション



III 区北壁セクション



IV区北壁セクション



I区SD1セクション



I区SD2セクション



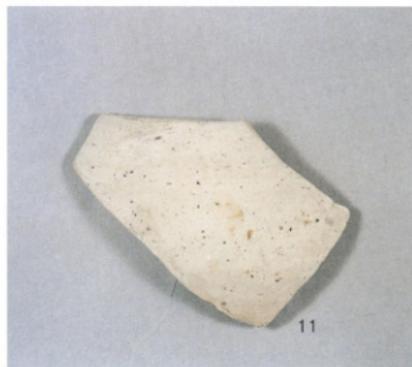
SB1P1柱痕完掘



III区P27遺物出土状況



作業風景



出 土 遺 物(1)



12



13



18

17

16

15



14

19
表19
裏

20

出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	うりじりいせき						
書 名	瓜尻遺跡						
副 書 名	農業集落道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	安芸市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第5集						
編 著 者 名	門田由紀						
編 集 機 関	安芸市立歴史民俗資料館						
所 在 地	〒784-0042 高知県安芸市土居953番地イ TEL (0887) 34-3706						
発 行 年 月 日	2005年3月						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うりじりいせき 瓜尻遺跡	こうちけん 高知県 あきし 安芸市 いのくち 井ノ口	39203	33° 31' 22.2"	133° 54' 06"	半成14年 5月9日～ 6月28日	21274m ²	安芸市土居西木戸～一ノ宮に至る農業集落道路整備工事事業
					11月14日～ 12月3日	84.26m ²	
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
瓜尻遺跡	集落跡	古代末から 中世	掘立柱建物跡	弥生土器・土錘・土師器・須恵器・古瓦 国内産陶磁器・輸入陶磁器・在地系陶器			

安芸市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

瓜 尻 遺 跡

2005年3月

編集 安芸市立歴史民俗資料館

発行 安芸市教育委員会

安芸市矢ノ丸1-4-40

TEL(0887)35-1020

印刷 (有)西村謄写堂